

ラオス最大の青銅仏

ワット・オントゥ (ラオス)

ご近所の方が毎日作る、品数豊富で栄養バランス満点のお昼ご飯
早朝の鐘の音と共に修行僧が市中を歩き出す、托鉢はラオスの風物詩

ピエンチャンの中心部に建つワット・オントゥ



ピエンチャンで最も大きな青銅仏



今にも動き出しそうなリアルな高僧の像

ピエンチャン最大の青銅仏

ラオスがまだ前身のラーンサーン王朝だった16世紀後半、当時のセーターティラート王は首都をルアンパバーンから現在のピエンチャンに移しました。そして都城の体制を整えるため、エメラルド仏を安置するワット・プラケーオや、ラオスの国章にもなっているタート・ルアンなどの寺院を次々と建立したのです。そのうちの一つがピエンチャン最大の青銅仏が祀られているワット・オントゥです。このお寺は1828年にシャム王国（現在のタイ）の侵入によって崩壊され、現在の姿は19世紀に再建されたものです。

本堂の中で目を引くのはこの高僧の像です。ラオスやタイのお寺ではこうして高僧や創設者の像を祀るのですが、ここまでリアルに作られている像は珍しいです。高僧のしわや筋肉の筋までが細かく刻まれていて、今にもお説法をするのではないかと思うほど、生き写しのように作られているのです。

植栽の上で鎮座しているのは、満面の笑みに垂れ下がった福耳、でっぷりとした大きなお腹が日本でのお馴染みの布袋様。唐の時代の中国の禅僧を神格化したものです。「泣いて暮らすも一生。笑って暮らすも一生。



軍の儀式で使われた星が飾られている塔

同じ一生なら笑って暮らせ」と、この布袋和尚の人柄は世界中の人々から愛されています。商売繁盛にも功德がありますが、何と言ってもこの笑顔で邪な心を払い、人々を楽しく幸せな気持ちにしてくれるのです。

お坊さんたちのお昼ごはん

ちょうどお昼時でホールではたくさんのお坊さんが食事をしていました。料理を作っているのはご近所の女性。「毎日だいたい30人分のお昼ごはんをお寺の調理場で作ってます。食材はご近所の方々が持ち寄ってるんですよ。たくさんの方がいますからね」と、教えてくださいました。ちょっと見させていただくと品数豊富なおいしそうなお昼ご飯です。

若いお坊さんたちに話を聞いてみました。

……今日のお昼ごはんは何ですか？

「今日は、焼き魚、もち米、パパイヤサラダ、鶏と大根の煮物、キノコのスープ、デザートはマンゴーです。毎日こんなにたくさん作ってくれるのでとてもありがたいです。私たちは朝とお昼は食べますが、修行中なので夜ご飯はありません。だからお



近所の方が作ってくれる
昼食を食べる修行僧

品数も多く栄養バランス
も満点のお昼ごはん

昼にしっかりと食べておくのです」

……朝は何を食べたのですか？

「朝は托鉢ですよ。毎朝5時に出かけて、ご近所の家やお店から食材をいただいて、6時過ぎにお寺に戻って食べるのです。」

毎朝5時からの托鉢

托鉢とは僧侶が鉢を持って市中を歩き、人々から食物や金銭をいただくことで、^{こつじき}乞食とも言われます。日本では殆ど見かけ



ラオスの風物詩となっている早朝の托鉢することはありませんが、ラオスでは風物詩と言えるほど毎朝あちこちで見かける光景なのです。

これは早朝5時。お寺の鐘の音と共に、何人もの僧侶がぞろぞろと歩きだします。ラオスでも早朝はかなり肌寒い時間、そこを裸足で1時間も歩くのですからかなり厳しい修行です。

そして途中で家やお店の前で足を止めてお経を称えます。するとこの時間であっても敬虔な仏教徒であるラオスの方々は外に出てきて、お経をありがたくいただき、お礼にお米やおかず、またはお金を鉢に入れてくれるのです。

ちょっと朝は早いですがこれはラオスに行ったら是非見ていただきたい光景です。

新型コロナウイルスにより、海外への渡航・取材ができない状況となってしまいました。つきましては今月号をもちまして連載を休止とさせていただきます。

長期間に渡りお付き合い下さり、誠にありがとうございました。

齋藤 浩司 (さいとう こうじ)

株式会社B-WAYグループ 代表取締役

互助会から葬儀社を経て2001年同社創業。2002年に葬送支援NPO法人を創設。2010年には宗教法人を新規認証。CSR活動として、2007年、お寺で余ったお供え物を困窮世帯へ届けるフードバンクを設立。2013年からは東南アジアの貧しい子ども達への生活・教育支援を開始し、現在はカンボジアのスラムで孤児院と幼稚園を運営。活動時に各国の聖地を訪れ、宗教家や現地の人々から文化を学んでいる。東京都新宿区出身。

